

名古屋柳城短期大学
第3回東日本大震災復興支援
ボランティア活動報告書
2013年度



協力：被災者支援センターしんち／ふじ幼稚園

目 次

第3回東日本大震災復興支援ボランティア活動について	1
現地活動プログラム	
A日程	3
B日程	4
写真で綴る2013年度ボランティア	
A日程	5
B日程	7
チーム・パティシエ	9
参加者の感想	
A日程	10
B日程	18
チーム・パティシエ	26
あとがきにかえて	27

種蒔き

マーガレット・ヤング

翼ひろげた天使が

愛と心理と光明との

種子をひと粒手に持って

飛ぶのを止めて考えた。

「これが大きくなったら、

すばらしい実がなるように、

どこへ蒔いたらよいのだろう」

救い主さま、それを聞いて、

にっこりわらっておっしゃった。

「私のために、その種子を

子どもたちの心に蒔いておくれ」

第3回 東日本大震災復興支援ボランティア活動について

キリスト教センター 村田 康常

3.11の東日本大震災から2年あまりが経過した2013年の5月、名古屋柳城短期大学では、ボランティア学生とキリスト教センターの教職員とが、3年目を迎える復興支援ボランティアの活動を本格的に開始しました。学生と教職員の関心は、これまで2回にわたって実施された東北の被災地での支援活動をいかに継承・発展させるかということと、新たに名古屋での継続的な活動が可能かどうかを探るという2つのテーマに向けられていました。この2つのテーマは、被災地でうかがった言葉から来ています。活動開始の前に下見に訪れた福島県新地町の「被災者支援センターしんち」で、震災を「風化させない」という被災者の強い思いと、復興支援は被災者との「キャッチボール」だという支援者の言葉に触れました。

これらの言葉は、私たち自身の現実感覚を問い直すことにもなりました。東京や大阪、名古屋などの大都市圏であたらしい日常生活を送っていると、ともすれば震災と津波、原発事故は過去のものになったような錯覚すら抱きます。どれだけの学生が、被災地の「いま」に関心をもっているのか、そして支援活動に自主的に参加してくれる学生はいるのだろうか、という心配も抱きました。

ところが、キリスト教センターのボランティア募集を待っていたかのように定員を大幅にオーバーして集まった学生たちは、「震災を風化させない」「被災者とのキャッチボールを継続する」という言葉に敏感に感じて、自分たちに何ができるのかを考えはじめたのです。この感受性の高さが、柳城生のすばらしいところでは。そして、実践力の高さは、彼らのもう1つの賜物です。現地派遣のボランティアに選ばれた学生たちだけでなく、人数の都合で現地派遣からもれた学生たちも、それぞれの活動の方向性を議論しながら活動を開始し、準備を重ねました。

さらに、柳城のボランティア活動の可能性を感じさせたことがありました。前年の被災地でのボランティア活動をきっかけに、現地に行った学生たちが「ボランティア・サークル」を学内で立ち上げていたのです。そして、キリスト教センターの今年の被災地支援に積極的に協力したい、という心づよい言葉を伝えてくれました。こうして、このサークルから、去年の経験をもつ2年生たちがリーダー役として加わることになりました。

こうした学生たちの熱意もあって、2013年度の活動は、2期間にわたる被災地での活動と、年間を通して継続的に行う学内での活動という2つの方向で展開されることになりました。

3回目となる被災地でのボランティア活動は、8月16日－19日のA日程と、9月1日－4日のB日程の2回、それぞれ学生8名、引率教員3名の合計22名で、「被災者支援センターしんち」を拠点にして実施されました。学生たちは、短大での目の回るような多忙な毎日のなかで準備を重ねて、現地では自分たちにできることを精一杯にやり、受け止められるかぎりのことを精一杯受け止めて、一まわりも二まわりも成長して帰ってきました。できたことよりも、受け止めなければならないことの方がはるかに多かった被災地でのボランティア活動でした。自分たちには瓦礫の撤去のようなボランティアはできないから、せめて被災地の方たちを励ます交流をしよう、と現地に向かいましたが、「センターしんち」をはじめ、どこに行っても笑顔で迎えられ、逆に励ましと元気をいただきました。

また、現地での活動に先立って、学内では3つの活動がスタートしました。

津波の被害を受けた「ふじ幼稚園」でいただいたひまわりの種を学内で育てて花を咲かせるという活動は、小島千恵子先生のゼミが引き受けてくれました。発芽から植え替えまで丁寧に育てられたひまわりは、やがて校門前の花壇に並んですくすくと育ち、道行く人たちにもその種の由来が分かるよう掲示が添えられました。夏の記録的な猛暑の中でも、小島ゼミの学生たちは、誰もいない夏休みの学校に毎日通ってきて水やり

をしてくれました。見事に咲いた花からは種も採れて、次の夏にも私たちにはするべきことがあるという思いを抱かせます。柳城の3つの附属幼稚園でも、同じひまわりの種が育てられ、ふじ幼稚園との新しい交流も生まれはじめています。

学内の選抜で現地派遣ボランティアからもれた学生たちの多くは、たとえ被災地に行けなくても被災者を励ますことのできる活動がしたいと、ケーキ作りのボランティアをはじめました。これが、7月からはじまった「チーム・パティシエ」による被災地にケーキを送る活動です。そして、これは、最も熱心で地道に続けられる活動となりました。毎週水曜日に「被災者支援センターしんち」のホールで開かれる水曜茶話会のうち、第2水曜日が柳城のチーム・パティシエの当番となりました。当初は、年間を通じて毎月の活動を継続するのは難しいのではないかと考えていたのですが、実習や長期休暇などで1年生のメンバーが活動できない月には、専攻科や2年生の先輩たちも助けに加わって、これまで毎月ケーキを被災地に届けてきました。被災地からも毎月お礼の便りが届けられて、名古屋と福島でのキャッチボールが実現しています。震災を風化させないという思いがかたちになった、継続的な活動になりました。


そして、11月の柳城祭では、新地町の仮設住宅の方々の手づくりの「裂き編みコースター」と「いちごのストラップ」を販売しました。夏に被災地でボランティア活動を行った学生たちは仮設住宅で裂き編みづくりを体験しながら被災者との交流を深めました。その学生たちと、ケーキを毎月送ってきた学生たちが、柳城祭の過密スケジュールの中で、コースターとストラップを販売しました。

これらの活動は、学生たちの熱意と取り組みだけでなく、多くの方々の支えによって成り立っています。特に、被災者支援センターしんち、日本聖公会中部教区センター、日本聖公会東北教区、そしてふじ幼稚園の皆さまには、多大なご支援とご協力をいただきました。本年度の活動を通じて、私たちは思いがけず多くの恵みを得ました。それはおそらく、私たちが被災者にもたらすことのできた何倍、何十倍もの恵みです。深く感謝いたします。第3回の活動報告書をまとめ、その豊かな出会いと恵みの一端をお伝えできることとなりました。ここに報告された諸活動とそれぞれの言葉とが、さらなる支援の深まりと継続へのきっかけとなることを願っています。



	8月16日(金)	8月17日(土)	8月18日(日)	8月19日(月)	
	しんちベース (被災地巡礼)	宿題やろう会・花火大会 (雁小屋仮設住宅訪問)	礼拝参加 (雁小屋仮設住宅訪問)	ふじ幼稚園訪問	
7:00		0730 朝食	0800 朝食	0730 朝食	7:00
				帰宅準備	
8:00	0800 集合(昼食持参) 【名古屋駅銀の時計】				8:00
9:00	0843 名古屋発				9:00
		【宿題やろう会・午前】		【ふじ幼稚園訪問】	
10:00			【主日礼拝】		10:00
	1023 東京駅着 1040 東京駅発				
11:00					11:00
	昼食				
12:00		【昼食】 現地の飲食店	【昼食】 しんちベース		12:00
	1233 仙台着 トヨタレンタカー手続き				
13:00				↑ 仙台駅へ移動	13:00
	しんちベースへ移動	【宿題やろう会・午後】	【宿題やろう会】		
14:00				↓ トヨタレンタカー手続き 駅周辺で自由時間 (夕食買出し)	14:00
15:00	【オリエンテーション】 【被災地巡礼】				15:00
16:00					16:00
17:00				↑ 1632 仙台発	17:00
18:00	(夕食買出し)	(夕食買出し)	(夕食買出し)	1808 東京駅着 1820 東京駅発	18:00
			【東日本大震災佛故者 慰霊流灯会】		
19:00	夕食	夕食		夕食(車中)	19:00
		【花火大会・広畑】			
20:00			夕食	↓ 2001 名古屋着 解散	20:00
21:00	一日のふりかえり	一日のふりかえり	一日のふりかえり		21:00
宿泊	ホテルみなとや	ホテルみなとや	ホテルみなとや		宿泊

	9月1日(日)	9月2日(月)	9月3日(火)	9月4日(水)	
	センターしんち 被災地巡礼	仮設住宅 センターしんち	ふじ幼稚園	センターしんち ふじ幼稚園	
7:00		朝食	朝食	朝食	7:00
8:00	8:00 集合(昼食持参) 【名古屋駅銀の時計】	今日の活動準備	今日の活動準備	今日の活動準備	8:00
9:00	8:43 名古屋発		今日の活動準備	茶話会【ほっとコーナー】	9:00
10:00	10:23 東京駅着 10:40 東京駅発	【ワーク】 仮設住宅 センターしんち 【裂き織り作業参加】	ふじ幼稚園へ移動	センターしんち	10:00
11:00	昼食(車中)		【保育補助】 ふじ幼稚園		11:00
12:00		昼食		【作品の贈呈・交流】 ふじ幼稚園	12:00
13:00	12:33 仙台着 トヨタレンタカー手続き	茶話会準備		仙台駅へ移動	13:00
14:00	センターしんちへ移動			(ガソリン給油)	14:00
15:00	センターしんち 【オリエンテーション】	【仮設住宅茶話会】 レクリエーション ミニコンサート		トヨタレンタカー手続き 駅周辺で自由時間 (夕食買出し)	15:00
16:00	被災地巡礼	交流 片づけ	ふじ幼稚園旧園舎訪問		16:00
17:00				16:32 仙台発	17:00
18:00	(夕食・朝食買出し)	(夕食・朝食買出し)	(夕食・朝食買出し)	18:08 東京駅着 18:20 東京駅発	18:00
19:00	夕食	夕食	夕食	夕食(車中)	19:00
20:00			贈呈作品の 仕上げ、準備	2001 名古屋着 2010 解散	20:00
21:00	夕べの祈り・黙想 一日のふりかえり	夕べの祈り・黙想 一日のふりかえり	夕べの祈り・黙想 一日のふりかえり		21:00
宿泊	ホテルみなとや	ホテルみなとや	ホテルみなとや		宿泊

写真で綴る 

2013年度ボランティア

A日程



新地ベースでのオリエンテーション



旧ふじ幼稚園の前で



津波被害にあった海岸線



仮設住宅での花火大会へ向けて

A日程



雁小屋仮設住宅の子どもたちと



磯山聖ヨハネ教会(仮礼拝場所)



ふじ幼稚園

B日程



津波被害にあった場所で



仮設住宅で裂編みを教えてもらう



仮設住宅でゲーム



仮設住宅で歌のプレゼント



ふじ幼稚園にて①



ふじ幼稚園にて②～制作活動～



ふじ幼稚園にて③～制作活動～



ふじ幼稚園にて④～みんなで作った作品～



センターしんちにて①



センターしんちにて②



ふじ幼稚園にて⑤

B日程

東日本大震災支援ボランティア

チーム・パティシエ



現地の人を思いながら



みんなのメッセージとお菓子完成



被災者支援センターの「ほっとコーナー」で



ふじ幼稚園へ届けてもらいました



みなさんからのお礼状



チーム・パティシエのメンバー(一部)

2回目の東北

学籍番号：24C07 氏名：大嶋 結衣

私は1年生の時、2012年東日本大震災の被災地ボランティアに参加しました。被災地の現状を見て、話を聞き、私たちが知ったことを多くの人に伝えていきたいと思いました。そして、どんなに月日経っても忘れず関わり続けていきたいと強く心に思い、2年続けて参加することにしました。

8月16日から8月19日の前半グループは仮設住宅の子どもたちとの関わりや、ふじ幼稚園での活動、主日礼拝に参加してきました。

1日目。センター新地で映像を見て話を聞き、地震発生から今までどのようなことが起こり、行われてきたのかを学びました。映像の中には保育園の子どもが避難訓練を行っている姿がありました。この園では地震の被害を受けてから月に2回避難訓練を行っています。園児の年齢に合わせた防災頭巾を用意しています。子どもが防災頭巾を自分で被る練習、子どもの誘導など月2回避難訓練を行うことでかかる時間が短くなっていったそうです。子ども達からの感想でも前向きな言葉がみられました。避難訓練の大切さを感じると共に、東海大地震の心配される名古屋などでも避難訓練を行う必要があると感じました。

その後、被災地巡礼を行いました。昨年から1年経っているので復興が進んでいると私は思っていました。しかし、道路は凸凹で、流された橋は昨年と同じ場所に転がっていました。あえて変化したと言えるところは、たくさんの瓦礫の山が少なくなったこと、復興計画の津波に対応できるような道路・線路・堤防の嵩上げのための土が仮置き場に置いてあることだけでした。本当に少しずつしか復興が進んでいないことを感じ取りました。

2日目。がんご屋という仮設住宅に行きました。ここは福島県の原因関係により移住してきた人の仮設住宅です。数回にわたる移住を行いがんご屋に来た人が多く、約331人の人が暮らしています。新地

町の仮設住宅のなかでも子どもの人数が最も多いと聞きました。

子ども達はとても元気で、集会所に設置されている玩具で一緒に遊んだり、仮設住宅を案内してもらったり、鬼ごっこをして楽しく遊びました。午前中は事前に作っていったパウンドケーキと一緒に食べました。午後はヨーグルトと一緒に作りました。男の子も女の子も楽しそうにヨーグルト作りを手伝ってくれました。

2日目の夜は浴衣を着て、広畑という仮設住宅のみなさんと花火大会を行い、楽しい時間を過ごすことができました。広畑の仮設住宅は、本学の“名古屋パティシエチーム”がケーキなど送り支援しているところです。

3日目。午前中は主日礼拝に参加し、前々から練習していた歌を2曲披露しました。とても喜んでもらえアンコールをいただきました。その場にいる全員で歌を唄い交流を深めました。午後は2日目に伺ったがんご屋に行きました。がんご屋の子どもたちと2日間という短い時間でしたが、とても仲良くなることができました。

3日目の夜は灯籠流しと花火大会があると聞き、見に行きました。会場までろうそくで道が作られていました。会場ではお坊さんが御経を読んでおり、メッセージや思いが書かれた灯籠が並べられ、海では船から灯籠を流していました。メッセージや思いが書かれた灯籠には、「忘れない」「忘れるな」「忘れられない」「頑張る」といった震災を受け止め前向きに進もうとしている姿が見て取れました。この花火大会は今回で3回目で、震災の起こった年から始まったそうです。一番迫力があつたのは花火ではなくお坊さんの叩く太鼓です。御経に合わせて太鼓を鳴らし、御経だけのときよりも何かすごいパワーが伝わってきました。見入ってしまうほど引き付けられるものがありました。

4日目。ふじ幼稚園に行きました。夏季保育の時期ということもあり人数も少なく、1時間ほどしか子ども達と関わる事ができませんでした。準備をしていったシャボン玉で子ども達との距離がすぐに縮まった気がしました。その後、園長先生のお話を聞きました。現在、ふじ幼稚園では亡くなった子どもの保護者の方と訴訟が起きています。園長先生は保護者の方の言葉を受け止め、一つ一つ説明し、今できることを胸をはってやっていくとおっしゃっていました。先生を辞めようと思ったこともあるそうです。しかし“今いる子ども達のためにできること”をやらなくてはいけないと思い武士の心で保育しているそうです。最後に“ひまわりお約束”という歌を手話付きで歌っていただきました。ふじ幼稚園では、ひまわりをととても大切にされており、ひまわりパワーで子ども達も先生方もがんばっているそ

うです。「笑顔広がれプロジェクト」はそのひまわりを広げていこうというプロジェクトです。名古屋柳城短期大学の花壇にもそのひまわりが咲いています。これは小島ゼミのみなさんが育てていただきました。その成長過程をコルクボードにまとめたものと、手作り紙芝居の印刷したものをふじ幼稚園にプレゼントしました。

この4日間でたくさんの人と関わり、お話を聴き、現状を目で見ました。たくさん考え、感じてきました。実際に行ってみて分かる事がたくさんありました。2回目であっても驚くこともたくさんありました。灯籠のメッセージにもあったように、この震災は絶対に忘れてはいけないと思います。私は決して忘れません。そして、東北という場所、東北で起こったことを少しでも身近に感じてくれる人が増えるといいなと思いました。

東北震災ボランティアを通して考えた事

学籍番号：24C46 氏名：藪下 智奈美

現地に到着し周りを見渡すと、沢山の緑であふれていました。一見、震災後の復興は着々と進んでいるように感じました。よく見ると、緑の中に約10m四方のコンクリートが等間隔で何十枚も並んでいました。現地案内の松本さんの話によると、震災前はそのコンクリート1つ1つに家が建っていたそうです。それらは全て、津波によって流されてしまったものでした。私は今まで東北に行ったことがなく、震災前の町並みや風景は写真や映像の中しか見たことがありませんでした。この時、目の前にあった景色から、住宅があり住民の笑顔が絶えない日々を想像することは容易ではありませんでした。

新地の方々に話を伺う機会がありました。皆さんそれぞれ心に深い傷を負っている方ばかりでした。それでも、新地の方々に元気を取り戻してほしい、新地を復興させたいと強く願い、ボランティア活動を行っているそうです。そんな姿を見て、私の方が元気や勇気をいただきました。

私は現地に着くまで、思い違いをしていました。

現地の方々に何かしてあげたい、何か役に立てるような事をしたい、そういう思いの中で新幹線に乗り込みました。しかし、現地に着き新地の方々や仮設住宅の子どもたちと触れ合っていると、皆さんとても明るく私たち以上に元気いっぱいでした。そして何より、信じられないくらい前向きでした。

ふじ幼稚園の旧園舎を訪れ、津波の生々しい爪痕を目の当たりにしました。車庫の壁に残された泥の後は、津波がどれほど高く、恐ろしい物だったのかをリアルに表していました。その場で伺った当時の様子は、映像として頭の中を流れていき、それは今でも忘れません。現場にいた子ども達、先生方がどれほどの恐怖に襲われたのかは、残念ながら私には計り知れません。しかしこの様な事実があった事は決して忘れてはならない、と強く感じました。

2年半前の3月11日に起こった東日本大震災は、この先月日を重ねるにつれて存在が薄くなっていってしまうかもしれません。しかし、今もまだ多くの行方不明者の搜索活動が行われています。また、避

難生活を余儀なくされている方も少なくありません。決して忘れてはいけないこの出来事を、私たち

は次の世代へ伝えていく事が求められているのではないかと考えました。

ボランティアに参加して…

学籍番号：25B43 氏名：服部 唯

8月16日～19日の間、東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加してきました。あの大きな地震から2年以上が経ち、私はすでに復興しているものだと思っていました。しかし、車で走っているとがれきの塊があったり、仮設住宅で住んでいる方がたくさんいたり、まだまだ進んでいないことを実感しました。

1日目は、被災地巡礼をさせていただきました。最初に、4日間のボランティア期間中お世話になる松本さんのお話を聞かせていただき、ビデオを見させていただきました。ビデオの中には、3月11日あの日を襲った大きな津波が、家や物のみ込む姿が映っていました。その光景は現実と思えないほどすさまじく、本当にこのようなことが起きたのか理解できませんでした。その後は車に乗って、実際に津波が来た場所を案内していただきました。その中で1番印象に残っているのは、ふじ幼稚園の旧舎を見に行ったことです。ここでは園児が乗っていたバスが流され、先生も亡くなっています。

玄関にはたくさんのお人形やお菓子などが置かれており、見た瞬間涙が止まらなくなりました。カーテンは泥だらけで、バスの車庫には私の身長より高い位置に津波の跡がついていました。この場所のがれきを含んだ津波が流れてきたと思うと、何も言えなく、胸が痛くなりました。花壇にはかざぐるま、小さいお地藏さん、ひまわりが植えてありました。お地藏さんは毎日、園長先生が形を変えるそうです。この日はみんなで遊んでいるように円をつくっていました。

そして最後にはみんなで「となりのトトロ」「ふるさと」を歌いました。声が震えてうまく歌えなかったけれど、天国にいる先生、子ども達に伝わっていれば嬉しいと思います。

2日目は、仮設住宅のがんご屋にお邪魔しました。着いた瞬間から元気な子ども達がお出迎えをしてくれました。

子ども達は本当に元気で、部屋の中なのに汗をかきながら遊んでいました。最初は少し遠慮していましたが、一緒にいる時間が長くなるにつれて慣れてくれて、一緒におやつを作って食べるなど、本当に楽しい時間を過ごすことができました。

3日目は、午前中に主日礼拝に参加させていただきました。みなさんと一緒に礼拝をした後、柳城生から歌のプレゼントを2曲させていただきました。アンコールまでいただき、緊張もしましたがみなさんに喜んでいただけて本当に嬉しかったです。

午後からは、2日目同様がんご屋にお邪魔しました。この日も外でブランコをしたり、追いかけてっこをしたり、汗だくになって遊びました。

この子ども達とはこの日が最後だったので、手作りのプレスレットをプレゼントしました。つい先ほどまで元気だった子が急に話さなくなり、泣きそうな顔をみているのがとても嫌でした。2日間がんご屋の子ども達とふれあい、最初は「どう接すればいいのだろう?」、「何して遊ぼう?」と不安でいっぱいでしたが、子ども達と本気で遊んで笑って逆にたくさんの元気をもらいました。みなさんに出会うことができ本当に良かったです。

4日目は、ふじ幼稚園を訪問させていただきました。旧舎とは離れた場所に建てられ、木を使ったあたたかい造りでした。ふじ幼稚園では少し時間をいただき、パネルシアター、シャボン玉、手遊び、紙芝居をやらせていただきました。私はまだ実習に行っていたことがなく心配がたくさんありましたが、みんなと協力し、成功したのでよかったです。

特にシャボン玉では、ハンガーや毛糸で大きいも

のを作り、とても盛り上がりました。子ども達の笑顔をたくさん見ることができて嬉しかったです。

遊んだ後、先生方が津波が起きた時の出来事を細かく伝えてくださいました。津波が起きた日は、卒園式の前日で、バスで子ども達を送っている時でした。バスは流され、水の中に投げ出された園児達を先生方は手探りでつかみ、バスの上にあげていきました。この日は雪が降るほど寒く、ずぶ濡れになった子ども達に、ビニール袋をかぶせずっと歌を歌っていたそうです。保育者は人の命を預かる仕事といいますが、この話を聞いて、本当に預かるとは、決

して軽い気持ちではできず、自分の命に代えてでも守ることであると強く思いました。そして私はより一層、保育者になりたい気持ちが強くなりました。

この4日間で、笑ったり泣いたり大変中身の濃い日々をおくることができました。ニュースや新聞では伝えられていないこと、現地に行ってみないと分からないこと、自分の想像していた以上のことばかりで胸がいっぱいになりましたが、一生忘れません。

最後に福島、仙台で出会ったみなさん、今回ボランティアに参加させてくれた先生方に感謝したいと思います。

東日本大震災復興支援ボランティア 2013

学籍番号：25B45 氏名：阪野 綾子

私は、8月16日～19日まで福島復興支援ボランティアに参加しました。

1日目、新幹線で仙台の駅に着くと周りの景色は愛知県とそんなにかわりがなくて本当に地震が起こったところだと思えませんでした。しかし、被災地の巡礼に行くために市街地を離れるにつれてどんどん高い建物がなくなり、平地になっていき、よく見ると瓦礫の山があつたり家の土台だけが残っていたりしました。その景色を見ながら新地ベースというボランティアの中心となっているところに行きました。そこで一緒に歩こうプロジェクトの松本さんと合流して、まず初めにふじ幼稚園が元あった場所へ行きました。そこで松本さんからその幼稚園で起こったリアルな話を聞かせて頂きました。その話は想像できないくらい壮絶で涙なしで聞くことは出来ませんでした。

次に磯山聖十字教會在元あった少し高台になっている丘に行きました。そこで松本さんに、津波が来る前と後の写真を見せて頂きました。津波が来る前の写真には、海からの強風を弱めるための海岸林やたくさんの家が写っていました。しかし、そこから見る景色には木々や家もなく、道も砂利道で住宅地とは思えませんでした。その光景を自分の目で見て、改めて自然災害の恐ろしさを目の当たりにすること

ができました。

2日目には、がんど屋というまだ沢山の方が住んでいる仮設住宅に行きました。そこに着くまでの車の中で、被災した子ども達とどう関わればいいのか不安で考えていました。しかし、その不安は着いて少ししたら消えました。初めは、私たちを見て「誰だろう？」という顔をしていた子ども達もすぐに笑顔になって一緒にブロックやキャッチボールをして遊びました。家が流されたり、家族を亡くした子ども中にはいたかもしれませんが、みんなとても元気で逆に元気をもらったという感じでした。

3日目は、主日礼拝に参加させて頂き柳城生らしさを実感しました。歌のプレゼントをしたときにアンコールといってもらえて、礼拝に来ていた方々と一緒に歌えたことがとても嬉しかったです。

4日目は、ふじ幼稚園に行きました。預かり保育で園に来ている子ども達としゃぼん玉で遊びました。津波を経験したのが嘘かと思えるくらい元気いっぱいでした。

その後に園長先生からお話を聞きました。ふじ幼稚園の園舎はユニセフから寄贈されたものだと聞きました。木で出来ていてとても暖かい感じがしました。震災後、幼稚園を再開した時の園児はお葬式ごっこや津波ごっこをしていたと聞き、とても心が

苦しくなりました。小さいからといって忘れることはできず、心に深い傷があるのだろうかと思いました。幼稚園では、その傷を癒すためにアートセラピーやプレーセラピーを行っていて、また卒園式した子ども達が集まれる「おさとがえり」があると聞きました。また涙が止まらないくらい辛く悲しいお話はとても心に響き、また保育者は子どもの命を守ることが何よりも大切だということを教えてもらいまし

た。

私は、この3泊4日という短い間に、自然災害の恐ろしさ、人の強さ、また震災から2年以上経っている今でも仮設住宅に住んでいる方も多くいることなどのニュースや新聞では伝わってこないことなど、多くのことを自分の目や耳から学ぶことができました。この貴重な経験を忘れることなく、これからの生活に活かしていきたいと強く思いました。

東北ボランティア

学籍番号：25C08 氏名：内田 英梨子

私はこの夏休みに東北ボランティアに行ってきました。

震災をテレビでしか見たことがなく、自分でもなにか力になりたいと思ってもなにも出来ずにいました。しかし、今回のボランティアで現地に行っても多くの人を笑顔にし、風化させないために震災を受けてない人たちに伝えて行くことが私たちのできる事だと考え参加しました。

被災地に着き、巡礼をする中でふじ幼稚園に行きました。そこで聞いたのは幼児と先生が亡くなったというお話でした。先生は子どもを助けようと泥水の中必死の思いで助けました。しかし、自分の身長をはるかに越える津波は小さな命を奪っていきました。私は涙がとまりませんでした。ふじ幼稚園の先生のようにどんなことが起きても強くあれる先生になりたいと思いました。

2日間にわたり仮設住宅を訪問しました。そこでは子どもたちと遊んだり宿題をやったりしました。私たちには計り知れない程の辛い思いをしたはずなのに、子どもたちはみんな笑顔でした。小さな公園で遊んだり、鬼ごっこをしたり、キャッチボールをしたりしていくうちに私はこの笑顔を守るために保育士になりたいのだと改めて考えさせられる時間でした。3日目の夜、灯籠流しに参加しました。そこに並べてあった、中学生の言葉に「負けません あなたの分も がんばるね」とありました。私は心が痛くなると共に、自分の弱さを感じました。私はな

にか人のために頑張ったことがあるだろうか、ただでさえ自分のことで精一杯で、なにか災難に直面するとすぐに弱音を吐いていたことに気づきました。ましてや、自分が中学生のときにこんなにも強い心があったとは思えませんでした。どんなことも乗り越えていける力を培い、人のためになる自分であるために常に笑顔でいようと思いました。ボランティアを通して笑顔でいることの大切さを感じることができました。

最終日、新しく立て直したふじ幼稚園に行きました。そこでは、パネルシアターやシャボン玉、手遊び、絵本の読み聞かせをしました。短い時間でも子どもたちがだんだん笑顔になっていくのを見ると、やりがいを感じました。最後に先生方が歌を歌ってくれました。被災した子どものために保護者の方が作った歌です。その歌詞に「君が笑ってくれたから僕はなんでも出来るんだ 遠く離れても 忘れない君との思い出」とあります。この歌を聞いて震災から立ち上がろうとしている人の強さを感じました。笑顔がどれだけの人を救うのかもわかりました。

ボランティアを経験したことで自分の考え方も変わりました。テレビや新聞ではわからない震災の爪跡をみて、支え合うことの大切さを伝えたいと思いました。今もなお仮設住宅で暮らしている人はたくさんいます。私たちには理解しきれないほどの辛い思いをした人がたくさんいます。この震災を風化させないためにも、募金や名古屋でも出来るボラン

ティアに参加し、少しでもはやく、そして多くの人 が笑顔になれる日がくることを願います。

震災を風化させない

学籍番号：25D04 氏名：市川 奈央

私は今回の震災ボランティアで、東北の方々の強さや実際の地震の状況など、実際に現地へ行かなければ分からないことばかりだと強く感じました。現地の方々は本当に親切で、笑顔を忘れずに生活されていたりしゃる様子でした。震災の被害にあったつらい思いは、外から見た人からは分からないくらいでした。でも現地の方々に話を聞いたり前に建物があつたところなのに何も無い敷地になっていて、テレビなどで見るよりも衝撃的でした。

私が一番印象的だったのは、ふじ幼稚園の園長先生のお話です。津波はとてつもない勢いで多くの人を犠牲にしたという言葉で私なりに理解はしていたものの、体験者からの話は思っていた以上に津波の怖さを感じました。二年半経った今も、住むところも前とは違い瓦礫などは前よりはなくなってきているとは言っても、人々の心の中にある思いや気持ちは一生消えることなく残り続けるのだと感じました。震災で今までの生活や大切な人をなくした方々

も普通に笑顔で過ごしていて前向きに前進している姿から強さをもらいました。それと同時に、他人から見て普通に笑顔で過ごしている人でも、実は心に傷を負っているのだと感じました。

私たちは震災のあつた直後は、テレビや新聞で報道されているのを見たりして募金をしたり、被災者の方々のことを考えたりしたかもしれませんが、少し時間が経った今、当時よりも意識が高まった人は少ない気がします。現地の方々はどんなに時間が経っても震災への思いは薄れないのだと思います。

私は今回のボランティアを経験して何年経っても何十年経ってもこの気持ちを薄れないようにしようと思いました。そして、自分だけでなくこの気持ちを多くの人に持って欲しいとも思いました。私はできるだけ多くの人に私が伝えられることを伝えていき、誰もが何年経っても忘れてほしくないと思っています。

貴重な4日間

学籍番号：25D37 氏名：中岡 樹里

8月16～19日、福島県南相馬市で3泊4日のボランティア活動をしてきました。現地でボランティア活動をしている被災地支援センターしんちの方々にお世話になりながら、現地の状態を見てきました。3年目である今でも津波の爪痕が残っていて、私達も津波の被害にあつた幼稚園や旅館などを見に行きましたが、建物が被害を受けたほか、何人もの人が命を落としていると伺いました。しかし、大切な人、大事な仲間を目の前で失ってやりきれない思いでいっぱいなのは、福島の皆さんは元気にそ

して前向きに生活していらっしゃいました。私達が今回お邪魔させていただきました仮設住宅では、元気いっばい子ども達とたくさんふれあい、子ども達の元気な笑顔を見ることが出来ました。

被災地支援センターの皆さんから聞いたお話では、目の前で家族が波にさらわれた所を見た方、家や街が壊され流されていくのを見た方など、たくさん辛い体験をされていて思い出だけでも辛いはずなのに、私達のためにそのような気持ちを押し殺してお話してくださいました。地震が来てから津

波が押し寄せてくるまでの様子、津波によって壊されていく街の様子など体験したこと全てをビデオなどを見ながら聞きました。津波が引いたあとも元の街の様子とは程遠く、なぎ倒された木や建物が崩れてできたたくさんの瓦礫、中でも1番衝撃が大きかったのは、津波によって流されてしまった人々のご遺体がたくさん転がっていたということでした。お話によると、泥やゴミにまみれ腐敗が進み、見ただけでは誰だか見分けることができない状態だったそうです。その中から自分の家族を探し出す作業はとても大変だったと伺いました。

津波によって大きな被害を受けたふじ幼稚園のお話も伺いました。園では津波が来ていることに気付いたのが遅く、最終の送迎バスに乗って待っている間に波に飲まれてしまいました。バスの中で先生方が一生懸命助け出しましたが、数名の園児が流されてしまいました。助けることができた残りの園児と先生方で建物の2階に避難していましたが、3月だったため寒さに耐えきれず、1名の園児と1名の先生が命を落としたそうです。亡くなっていく様子を目の前で見ていた子ども達や先生方の気持ちを考えると、やりきれない思いでいっぱいです。その他

にも家に送り届けたあとに被害にあって亡くなってしまった園児が数名いたようです。ふじ幼稚園では園児12名、先生1名の合計13名が亡くなりました。その時は全員が悲しみ、水が怖くなってしまったり精神的に塞ぎこんでしまう子ども達が出てきていましたが、3年目である現在は、少し離れた所に新しく園舎ができ、皆さん笑顔で幼稚園生活を送っています。

いま現在の福島県は、まだ完全に復興できたとは言えないかもしれません。瓦礫の山も残っているし、壊れたままの建物もたくさんあります。しかし、福島の皆さんは一生懸命生きています。子ども達も元気です。このことはメディアの情報だけではわかりません。現地に行って初めて知ることができることだと思います。自ら現地に行くことで、自分の中の何かが変わりました。この4日間にとっても貴重な体験をたくさん得ることが出来ました。ここで見たことや聞いたことは、この先に伝えていくべき出来事だと思います。これから先、機会を見つけてこのことを是非お話していきたいと思うので、この4日間で学んだことをしっかりと心に刻んでおきたいと思っています。

ボランティアで学んだこと

学籍番号：25D42 氏名：服部 さくら

私は8月16日から19日の4日間、東日本大震災復興支援ボランティアに行かせていただきました。この4日間で印象に残っていることは大きく分けて3つあります。1つ目は被災地巡礼の際、1番初めに案内していただいた旧ふじ幼稚園です。この園は園児、先生が津波によって亡くなってしまうという悲しい出来事があった幼稚園です。園の玄関には溢れんばかりのお花や、ぬいぐるみ、メッセージを書くノートが置いてありました。そこで、私たちはボランティアセンターの方からこの園であった出来事を聞き、手を合わせ、亡くなってしまった子どもたちに向けて「となりのトトロ」を歌いました。園に着いたときから、私は震災当日の情景を思い浮かべ

ました。苦しみながら、凍えながら、恐怖の中で亡くなってしまった子どもたちや先生のことを考えると、涙がとまらず歌もしっかりと歌えませんでした。

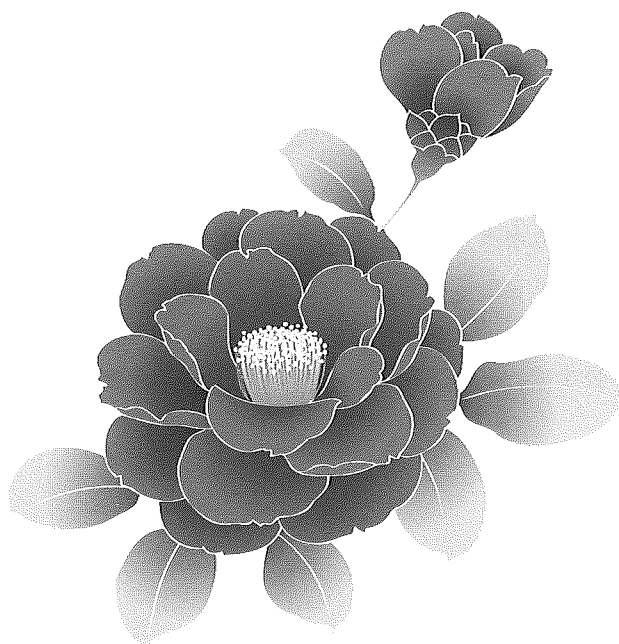
2つ目に印象に残っていることは3日目に参加させていただいた灯籠流しです。真っ暗な海の中浮かんでいる灯籠はとてもきれいでした。灯籠流しの後半には花火大会がありました。花火大会の前にみんなで手を繋いで黙祷をしたことがとても印象に残っています。黙祷をしていると、あちこちから涙をすすする音がしてきました。ここにいるほとんどの方はあの大きな震災を実際に体験し、自分の家族、友人など大切な人を亡くしてしまった方々なのだろうか。そう考えると私も涙がとまりませんでした。こ

の海があの日、たくさんの命、たくさんの物をのみ込んで行ってしまったなんて今日の前にある静かな海からはとても信じられませんでした。

3つ目に印象に残っていることは震災後新しくできたふじ幼稚園に伺ったことです。建物は大きな窓ガラスが目立つ立派な園でした。そこでは園児たちとシャボン玉などをし、とても短い時間でしたが子どもたちとの距離をすこしだけ縮めることができました。その後、別室で園長先生から震災当日から今日までのふじ幼稚園についてのお話をさせていただきました。1日目の巡礼の時に、旧ふじ幼稚園で教えていただいた話をさらに細かく教えていただき、亡くなってしまった子どもたちの保護者の方への対応、ふじ幼稚園再開までの先生方の心の葛藤、震災後の子どもたちの恐怖心のケアの仕方についてなどを教えていただきました。園長先生のお話から浮かぶ当時の情景について、園長先生の涙ぐむ姿を見て、私たちは涙をこらえることができませんでした。そ

して最後に震災当日子どもたちを助けた先生方が私たちの前に並んでくださいました。驚くことに若い先生ばかりで、私たちとさほど大きく年齢が変わらないように見えたので自分だったらできただろうか、と考えさせられました。

私は今回このボランティアに参加させていただいたことで多くのことを学びました。テレビや新聞には載りませんでしたが、震災当時は多くのご遺体が転がっていたことを知り、テレビや新聞を見ているだけでは本当の事実は分からないことも多いのだと思いました。今、風化されつつある東日本大震災を考え直すためには、現地に行き直接目で見て、感じる事が大切だと思いました。現地の方と交流をしたことで、直接震災のお話をしなくても、時折みせるどこか悲しい笑顔などから、辛くても前に進むうとする姿を感じることができました。とても充実した4日間だったので参加できて本当によかったと思います。



東日本大震災復興支援ボランティア報告 2013「B日程」

ボランティアに参加して

学籍番号：24D02 氏名：磯部 彩衣里

昨年に続き、2度目の参加となった被災地支援ボランティア。

1日目は、津波を体験された方々と一緒に被災地の「巡礼」をさせていただきました。1年前にはがれきの山だった場所はきれいになっていましたが、草木が茂っていて家の土台だけが残っているという光景は変わっていませんでした。

その後、新地町役場へ行かせていただき、役所の方が体験された震災と津波のときのお話を聞くことが出来ました。その方は両親の安否がわからない中、市民の安全を第一に考えて被災者の救助や避難誘導、搜索活動や連絡などの仕事を優先して活動したそうです。活動を続ける中、安置所でご自分のご両親の遺体を見つけた時の気持ちなどを話してくださいました。涙がとまりませんでした。それでも、その方は辛い経験をされているにも関わらず、とても明るい方でした。そんな姿をみて、私はもっと強くないといけないと思いました。

2日目は、広畑仮設住宅へ行きました。裂き編みを体験させていただき、午後から柳城ボランティアが中心となってレクリエーションや茶話会の時間を設け、交流会を開きました。たくさんの方々の笑顔に触れ、私たちにとっても本当に楽しい時間を過ごすことができました。

被災地のみなさんに元気を与えるどころか、逆に私たちが元気をもらうことのできた一日でした。

3日目は、ふじ幼稚園へ行かせていただき、年少から年長まで、4クラスで1つの作品を作る活動を

しました。作品が出来上がったときには、子ども達も喜んでくれて、とても良い作品に仕上がりました。午後からは、子どもたちと一緒に園内で遊びました。みんな、元気で笑顔の素敵な子ども達でした。こんなに小さな体で津波を経験しているのだと思い、先生方も含めふじ幼稚園全体で支えあい乗り越えてきたのだと感じました。

最終日には、「被災者支援センターしんち」で、茶話会のお手伝いをさせていただきました。2日目に訪れた広畑仮設住宅の方も来てくださって、再会を喜びながら歌を歌ってみなさんとお話ができ、楽しい時間を過ごしました。私たちの歌を聴いてくださっているあいだ、一緒に口ずさんでくださる方、笑顔で見てくださる方、涙を流しながら聴いてくださる方。そして、ずっと笑顔でお話される中で、仮設住宅生活の不便なことや、家族のことなどを語ってくださいました。

最後には、みなさんから、楽しかった、ありがとうと言ってもらい、胸がいっぱいになりました。

泣いて笑っての4日間でしたが、私たちのために辛い記憶をお話いただいたたくさんの方々、子ども達の元気な姿、仮設住宅の方々の笑顔は忘れません。

ここで出会ったすべての方々に感謝です。

私たちが元気をもらいました。被災地では、まだまだ復興していないところがたくさんあります。そのことを私たちが伝えていく。

これで絶対終わらない。終わらせない。この気持ちを大切に、今後の活動につなげていきます。

出会い

学籍番号：24D32 氏名：中村 柚那

9月1日～9月4日までの4日間、東日本大震災復興ボランティアに参加しました。

到着後、被災者支援センターしんちでレクチャーを受け、被災地巡礼を行いました。そこで、震災に遭われた方から貴重なお話を聞かせていただきました。

どの方も「まさか津波がくるとは」、「急に黒い壁の水が襲ってきた」と話しておられました。一瞬で全てを飲み込んだ津波。あるはずの家などが流され、一面見渡せるようになっていくその景色が、今なお残されている津波の傷跡として、自然の力の強さと恐ろしさを物語っていました。

2日目、広畑仮設住宅を訪問し、午前中はそこで裂き編みを作っている方たちに教わりながら、私たちも実際に体験しました。

午後からは、茶話会を開いて歌や簡単なゲームを楽しみ、学校で作った名古屋名物「鬼まんじゅう」を食べながら、交流を深めました。私は、大正生まれの男性お2人とお話をしました。戦争を経験し、大地震を経験し、一度の人生で2度も大きな出来事を乗り越え、今も元気に過ごしているその方たちの姿はとても立派でした。今の楽しみは「釣りをすること」「散歩をすること」と嬉しそうに話しておられました。

3日目に訪れたふじ幼稚園では、時間をいただいて設定保育を行いました。木の絵を描いた大きな布に子どもたちの手形で葉っぱを加えて大きな木を完成させるという活動です。作品を4クラス分あわせると、1つの地球に各クラスの木が立ち、木の下では若葉に見立てた先生方の手形が子どもたちを支え、見守っている大きな絵になります。子どもたちは、お礼にと歌のプレゼントをしてくれました。一生懸命歌う姿を見て、あの小さな体で震災という大きな出来事を体験しながらも、笑顔で元気に生活していることを実感しました。心の中の見えない気持ちにも寄り添い配慮できる保育者になりたいと、改

めて思いました。

子どもたちが降園した後、園長先生から震災時から今までの貴重なお話を聞かせて頂きました。様々な思いがある中、園を再開し、そして亡くなられたお子さんの親御さんと笑顔プロジェクトを行い、子どもたちを一番に考え少しずつ前に進んでいる先生方の姿はとても立派で、同じ保育者を目指す私にとって大きな励みになりました。

4日目、被災者支援センターしんちで毎週水曜日に行う集会に参加し、出し物を披露しました。午後からは、再びふじ幼稚園を訪れ、完成した作品をお披露目しました。子どもたちは初めて見る大きな作品に目をキラキラ輝かせていました。そして、お別れするとき、私たちの車が見えなくなるまで手を振り続け、見送ってくれました。

この4日間で、多くの素敵な出会いがありました。言葉では表せないほどの貴重な体験をし、多くのことを考えました。大震災を経験し、様々な心の傷を抱えているだろう人たちが、それらを感じさせない笑顔と元気で前を向いて懸命に生きていました。その方たちが私たちにこんな言葉をかけてくれました。「震災があったからあなたたちに出会えた」、「辛く逃げ出したい時は、大震災に遭ってもこうして頑張っている私たちを思い出してあなたたちも頑張ってもらいたい」この言葉は、簡単には口に出せない言葉だと思います。それでも言葉にして私たちに伝えてくれました。

ボランティアに参加した私たちに出来ることは何か。それは、風化していかないよう、この4日間の全てを多くの人に伝え、これからも支援し続けることだと思います。一人一人出来ることは小さいかもしれませんが、その小さな力が集まると大きな力となるでしょう。そのために私は、今後も活動を繋げていきたいと思っています。

最後に、このような貴重な体験をさせて頂いたことに感謝いたします。

復興支援ボランティアを通して

学籍番号：25A02 氏名：天木 梨乃

東日本大震災から2年半がたちました。もうそんなに経ったのかと思う人もいると思います。私もその一人でした。今回、復興支援ボランティアに参加したのは、被災地に行ってみたい、実際に自分の目で見てみたいと思ったからです。活動では初めての経験をたくさんしました。その中でも特に心に残っていることが3つあります。

1つ目は、センターしんちの方に案内してもらった、「被災地巡礼」です。周りは、草が生えており、家はほとんどありません。家の土台が残っているだけでした。コンクリートの道には、長い傷跡がありました。津波により、物が流されてその時についた傷跡です。また、線路も流されてしまったので、今は、この地域に電車が通っていません。カーナビに踏切の指示がありましたが、その場所には何もありませんでした。機械の力なしでは動かすことのできないものが、津波によって簡単に流されてしまったのです。海岸の近くいった時、「ゴーゴー」という音が聞こえました。初めは雷が鳴っていると思っていました。しかし、その音は波の音だったのです。普通の状態でも海が怖いと、このとき初めて感じました。「地平線から黒い壁が押し寄せてきた」津波の被害にあった方みなさんがそうおっしゃっていました。実際に自分の目で見て聞いて感じて改めて津波が恐ろしく感じました。

2つ目は、広畑の仮設住宅訪問です。そこでは、裂き編みを体験し、リクリエーション、ミニコンサートを行いたくさんの方と交流しました。冗談を言ったり、笑ったりと元気いっぱいのみなさんから私たちがパワーをもらいました。ある方が私に「保母さんみたいな顔しとる、次の世代を育てる良い保母さんになってね。」とおっしゃいました。その言葉がとても心に残っています。

3つ目は、ふじ幼稚園訪問です。この園は、太陽に向かって咲くヒマワリのような子どもたちがいる

園でした。ここに通っている子どものほとんどは震災の被害にあいました。震災の後、子どもたちはお葬式ごっこや、津波ごっこをしていたそうです。それを見た先生はどうだったでしょう。とても辛かったに違いありません。先生自身の心のケアからはじめて子どもたちの心のケアを行い、子どもたちの遊びもお葬式ごっこからお医者さんごっこへ、「死」から「治す」へと変わったそうです。子どもは、大人のことをよく見えています。だから、震災のことは口に出してはいけないと思い、たくさんのことをため込んでいたはずです。そのことを思うと、心が苦しくなりました。

ふじ幼稚園を訪れて、命がけで子どもを守ること、残された命、生かされた命を育てていくこと、保育の大変さなどたくさんのことを学ばせていただきました。保育者になるために勉強する私にとってふじ幼稚園の先生方は目標となりました。

4日間の復興支援ボランティアを通して、たくさんの方に出会いました。漁師の町だった新地町は津波により船が流されてしまいました。今でも漁ができない状態です。また、広いイチゴ畑でのびのびと暮らしていた子どもたちは、仮設住宅やアパートで暮らしています。あの大震災から2年半が経ちましたが、まだたくさんの方たちが辛い思いをしています。しかし、そんな中でも「震災のせいで何もかもがなくなってしまった。けれど、震災がなかったらあなたたちに会うことができなかった」と、出会った方たちが語ってくださいました。この言葉は一生忘れることができないでしょう。私ができることは限られていますが、名古屋でできる活動をこれからも続けていきたいです。そして、この震災を風化させないでいきたいです。

今回、復興支援ボランティアではたくさんの方にお世話になりました。ありがとうございました。

被災地ボランティアを通して

学籍番号：25A33 氏名：高木 遥

9月1日から4日、福島県新地町を中心に被災地支援ボランティアに参加しました。

震災が起きてから何か支援がしたいと思ってはいたものの、この2年間何もしてきませんでした。むしろ忘れかけていました。災害の写真やニュースを見ても、他人事のように思っていました。だからこそ、今回の被災地ボランティアに参加して実際にこの目で見て、感じてみたい、新聞やニュースで知り得ない被災者の生の声が聴きたいと思ったのです。

被災地巡礼では、震災の悲惨さを痛いほど感じました。海岸に近い高台から見渡すと、住宅の基礎部分だけが残され、草が生い茂り、瓦礫が残っています。橋や線路も壊されていました。ここの海を見て、初めて海が怖いと感じました。海拔10メートル以上の高台に避難しても波にのまれた、水平線が壁となって迫ってきた、と被災地を案内していただいた現地の方々が話してくださいました。目の前で家族や家が流された話、人々が流される光景を目の当たりにし、死体の山を見た話など、一言ひとことが重くのしかかってきました。しかし、話をされている表情は暗くなく、むしろ、「震災のおかげで巡り合えたのだから感謝だね」、「もしこの先つらい事があったら私たちを思い出してほしい」と笑って言うてくださったことに驚きました。

仮設住宅訪問では、裂き編みを体験し、茶話会ではミニゲームやミニコンサートを開いて、楽しい時間を過ごしました。手作りの鬼饅頭は好評で、レシピをメモする姿に嬉しくなりました。

一番印象に残っていることは、ミニコンサートでギター演奏が出来たことです。みんなで歌を歌って、その中で、笑顔になる方や涙ぐむ方がいらっやっやっ、言葉では伝えにくくとも歌では無条件に伝わる

ものがあるのだと改めて感じました。

ふじ幼稚園訪問では、年長組を担当し、手形を押しながら大きな木の絵を作る活動をしました。初めて子どもたちの前に立ち指導出来たことは、これからの教育実習に向けてとても勉強となりました。一緒にマラソンや鬼ごっこで走り回り、笑い合ったこの子どもたちの3分の1は仮設住宅で暮らし、住んでいた家が流されアパートで暮らしている子たちがたくさんいるとうかがいました。子どもたちの純粋な笑顔の裏に、彼らも被災者だという思い経験があることを忘れていました。けれども、子どもたちは感謝の気持ちを元気いっばいの歌にして贈ってくれました。その歌のお礼に、最終日に私たちからも歌を贈って、とても喜んでいただけました。

その後に訪問した旧園舎では、津波の跡が残り、亡くなった園児11人と教員1人の風車とひまわりやたくさんの花が咲いていました。園長先生が、ここは私の源になるとおっしゃっていたが、本当に園庭には今にも園児が走り出しそうな雰囲気、きっと園長先生の深い愛に包まれているのだと感じました。

まだ書き切れない事ばかりですが、私はこの4日間でとても貴重な体験ができました。ボランティアで来ているのに、みなさんから明るい笑顔でありがとうと言われ、逆に元気づけられました。震災から2年半が過ぎても、復興は進んでおらず、仮設住宅で暮らしている方々もまだまだたくさん残っています。ここで見たこと、聞いたことを胸に刻み、伝えていきたい、そして、ここで終わりではなく、愛知県でも出来る支援に取り組み、ここから被災地へビックスマイルを届けていきたいと思います。

貴重なボランティア体験

学籍番号：25A43 氏名：服部 美菜

今回の被災地ボランティアに参加して、たくさん
のを感じ、学ぶことができました。

まず、被災地を巡礼したとき、3年たっているの
にこんなにも復興していないんだと衝撃を受けまし
た。家が建っていた跡だけが、数えきれないほど残
されていて、草が生い茂っていました。その家の跡
が見えないほど草木が生い茂っている場所もたく
さんあり、それだけでも津波被害の悲惨さを物語っ
ていました。

私たちにつきそって下さるセンターしんちの方々
の話を聞きながらの巡礼は、心にずんとくる、悲し
いことばかりでした。そのお話の中で特に心に残っ
たのは、「自分が生きなきゃ人は助けられない」と
いう言葉です。津波が襲ってきたその時には、逃げ
るのに必死で、助け合わなければという気持ちがあ
っても、まず自分が生きなきゃ、と自分を最優先
に考えなければならぬと話してくださいました。
その話を聞きながら、その辛さが私にも伝わって
きました。

私は話を1つ1つ受けとめ、悲しみを感じました
が、その中で被災地の方々のすばらしさに気づくこ
とことができました。3年しかたっていないのに、記憶
していることを、重たいことも悲しいこともすべて
含めて、しっかり伝えてくださったのです。私は胸
を強く打たれました。なんて心が強いんだと感じさ
せられました。

私たちはそんな方々にレクリエーションやコン
サートを披露しました。みなさんが喜んで笑顔を見
せてくださったことをとても嬉しく思いましたが、
同時に、まったくといっていいほど復興の進まない
この地で、自分たちにはこんなことしかできないの
かと思うと悔しくてなりませんでした。実際に、仮

設住宅の人と交流し、お話をうかがって、長く生活
するには過酷な環境であることを知りました。また、
私たちの生活が豊かで幸せであることにも気づかさ
れました。被災したすべての方々が一日も早く良い
環境で生活できるようにならなければと、強く心に
思いました。

ふじ幼稚園では、保育科に入学して初めての設定
保育をさせていただきました。反省点がいくつかあ
ります。まず、準備ができていなかったこと。前日
に先輩に保育の仕方を教えてもらったこと。そのた
め設定保育のときは先生に助けられっぱなしで、忘
れ物もしてしまいました。いかに事前の準備が大事
か思い知らされました。こんな失敗だらけの保育で、
子どもたちに申し訳なかったと思います。でも、子
どもたちは笑顔いっぱい一緒に作業してくれて、
本当に救われました。ふじ幼稚園の子どもたちはと
てもいい子ばかりで片付けも手伝ってくれて、先生
方の保育がすばらしいからこういう子が育つんだと
思いました。設定保育の後も、お昼や先生方が行く
保育を共にして、子どもたちと遊び先生の保育を見
る機会がもてました。貴重な体験をさせていただきました。

震災ボランティアは、1日1日の内容が濃く、貴
重な体験ができました。この体験を通して感じたこ
とや学んだことをしっかりと皆に伝えていこうと思
います。また、他の学生もぜひボランティアに参加
してもらえるよう呼びかけをして、もっと被災地の
人々とキャッチボールができたらいと思いました。
この震災ボランティアに参加して、そこで関わり、
いろいろなことを教えてくださったすべての
方々に、感謝しています。

たくさんの学びがあった4日間

学籍番号：25A54 氏名：山岸 里奈

私は、9月1日から4日までの4日間、福島・宮城へボランティアへ行きました。現地につくと想像をはるかに越えた景色が広がっていました。

3月11日から2年半もの時間が経過しても、津波に襲われた土地には何もなく、ただ2年半かけて成長した雑草のみがありました。被災地巡礼では、そんな景色の中を巡りながら、実際に被災した方々から話をうかがいました。高台にいるのに10m以上の黒い壁が近づいてきて、自分の上を津波が通って行き、そのまま波にのまれ流されたが、竹につかまり助かったという話をうかがいました。また、家の土台だけが残った何もない場所で、巡礼のガイドをしてくださった方が言った「ここが私の家です」という言葉。自分の親しんできた現実が急に崩れてしまうような感じを覚えました。

町役場に務めている方からは、震災直後からの体験をうかがい、死体の山から人探しをした話や、ご自分のご両親をみつけたときにそれを認めることができなかつた話など、重く生々しい話をうかがいました。その方は、つらさや悲しさを抱えていらっしやつたはずなのに、私たちに向かっては笑顔でお話されていました。

仮設住宅を訪問した際には、何も持たずに身体だけで逃げてきたので、仮設での生活はお金も1円もないところからのスタートだったとおっしゃっていました。仮設住宅が建てられる前は、2ヶ月間体育館で過ごしたと言っていました。寝転がることはおろか、座っていても足も伸ばせなかつたそうです。「あたりまえはあたりまえじゃないんだよ」という

言葉が、すごく胸に響きました。

ふじ幼稚園を訪れて、保育に参加し、制作を行いました。1番印象的に思ったことは、子どもたちがとても良い子ばかりだということです。ふじ幼稚園に通う子どもたちの家は、かつては農家が多かつたそうです。震災後は、それまで大きな家に住んでいた子どもたちの多くが、仮設住宅やアパートで生活しています。子どもたちはきっと、無意識に我慢することを覚えていたのでしょう。みんな、とても人なつこく無邪気で元気な子たちでしたが、その笑顔のかけにたくさんのことがあつたのだと感じました。

津波で被災した旧ふじ幼稚園園舎では、玄関の前に机があり、たくさんのお供え物と1冊のノートが置いてありました。そのノートには、旧園舎を訪れた人たちから、津波で亡くなつた子どもたちと先生へのメッセージが書いてありました。その中に、1人の女の子からの書き込みがたくさんありました。「今日アサガオがさいたよ。」「今日は晴れだよ。」などとありました。きっと仲の良かつた友達に向けてでしょう。

現地で出会つた方は、みんな笑顔で迎えてくださいました。「私も頑張るからみんなも頑張つてね」とボランティアへ行つたはずなのに元気をもらつてしまいました。ボランティアの活動を通して、命の大切さや人との助け合い、人間の生命力の大きさなど、たくさんのことを学べたと思います。これからも、小さなことでも被災地の役にたちたいと思っています。

命の尊さを実感

学籍番号：25A53 氏名：森 小希子

私たちは9月1日から4日間、福島・宮城県へボランティアへ行きました。

1日目は、被災者支援センターしんちで震災についてまとめたビデオを見ました。そのときには、ま

だ震災でどれだけのことが起きたのかあまり分かりませんでした。しかし、その後で、被災された方たちに説明をしてもらいながら被災地をまわる巡礼をして、道路が割れていたり道路標識の看板が曲がって落ちている光景を自分の目で見て、また、漁師が多い町だけど放射線の影響で魚を取ることができないので、がれきの撤去をしているというお話などをうかがって、復興の進まない現実をはじめて実感しました。現地の方たちが口を揃えておっしゃっていたのは、津波は黒い水の壁のようだったということでした。津波のこわさが生々しく伝わってくる言葉でした。

この巡礼で今も強く印象に残っているのは、津波で家が流されてしまったあとの、土台のコンクリートだけが残っているところに、一輪の花が咲いている光景でした。自分には、がれき撤去などの作業はできないけれど、被災された方たちと、心と心の「キャッチボール」をしようと決めました。

2日目は広畑仮設住宅を訪問し、裂き編みのコースターを作る体験をさせてもらい、私たちの用意したレクリエーションとミニコンサートを行いました。レクリエーションでは、時間配分が分からなかったり応用ができなかったりで、あたふたしてしまったのが一番の反省点です。また、仮設住宅で迎えてくださった方には高齢者も多かったのですが、コンサートで歌った歌は、高齢者向けではなかったことも反省点です。それでも、私たちの歌を聴いて涙を流す方もいらっしゃって嬉しかったです。お話をする中で、ある方が、「今まで家族で楽しく過ごしていたけど、今は仮設住宅で1人で暮らしていて、震

災のことを思い出してしまうからこうやってみんなが集まって、楽しく過ごしながら笑っているんだよ」とおっしゃっていました。本当に辛い時間の中で、私たちの訪問が笑顔を作るきっかけになれば、と思いました。また、名古屋で作って持っていった「鬼まんじゅう」みなさんに喜んでいただき、レシピまで聞いてくださって、そこにも笑顔が生まれました。これからも、お菓子を作って届ける活動ができればと思いました。

3日目はふじ幼稚園で保育に参加しました。この保育を通して、活動をしっかり行うことも大事だが、子どもたちを並ばせたり手際よく活動を進めたりという配慮も大切だということ学びました。

子どもたちは、みんなとても元気で、本当に震災の影響を受けたのかと思ってしまうほどでした。でも、子どもたちは、震災のことを話したらお父さん、お母さんの顔が曇ることがわかっていて、あまり口に出さないのだとうかがいました。ふじ幼稚園の旧園舎ではそこに来た人たちが名前を書くノートを見ました。そこには、ある女の子が週に1回は来ていて、日々の報告を亡くなった子たちにしていました。

このボランティアを通して知った被災地の今の現実、テレビなどで見ていた印象をはるかに越えていました。言葉が出ないような現実がたくさんありました。その中で、私たちが支援をしに行っただけで、逆に笑顔にさせていただきました。そして、命の尊さを実感することができました。これからは、このことを考えながら日々の生活をしていきたいし、来年のボランティアにも参加したいと思います。

大切なことを学んだ貴重な時間

学籍番号：25C07 氏名：入江 祐果里

4日間、東日本大震災復興支援ボランティアに参加し、被災地へ行ってきました。

仙台駅に着き、最初に目にしたのは、本当に震災があったのかと思ってしまうほど、愛知県とあまり変わりの見られない街、そして笑顔で話す人々でし

た。しかし、被災地へと移動して行くうちに、徐々に景色が変わって行きました。多くの傾いた木々や住宅のあった跡など、初めて目にする光景ばかりで、想像するだけでも辛く怖いと感じてしまう情景がとても多く見られました。道路標識はつぶれ、海の堤

防のような物が住宅地へ流れ込み、大きな岩は倒れ、ガードレールや橋などは傾いていました。また、津波と共に流されてきたがれきやゴミなどが残っている所もありました。そしてその多くが、津波がどの方向からどのくらいの強さで押し寄せてきたのかをはっきりと物語っており、とても胸が苦しくなりました。

仮設住宅での茶話会やセンターしんちでの「ほととコーナー」では、震災の話を聞いたり、一緒にレクリエーションを行いました。目の前で家族が流されて行くのを見た方、遺体となって家族が見つかった方、必死の思いで難を逃れた方など、ほとんどの方が家や家族を失っておられました。そして、みなさん声を揃えて、「黒い壁が何度も押し寄せて来た」と話していました。その光景は、怖くて想像することすらできませんでした。

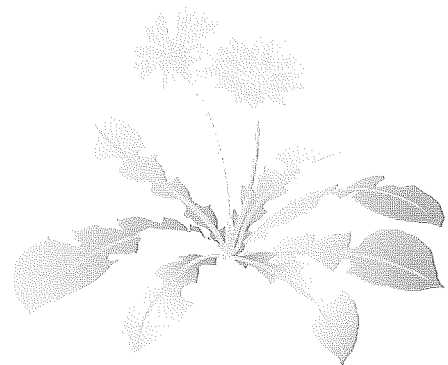
町役場の方にお話を伺ったところ、津波が来た地域は大きな街ではないため、遺体のほとんどが知り合いだったそうです。多くの遺体はがれきなどで傷付けられ、身体中がボロボロであったため、一人一人顔を確認していくうちに、自分の母親を見つけたそうです。しかし、頭ではわかっていても認めることができず、お兄さんに確認してもらい、やっとの事で現実を受け入れる事ができたと話されていました。

ミニコンサートでは、私たちが歌った歌を聞いて、涙を流している方もいました。どれだけ年月が経っても、決して悲しみや辛い思いを忘れる事はないのだと思います。それでも笑顔で毎日過ごしていけるのは、みんなが支え合っているからだと感じました。

津波が来た時、現地のふじ幼稚園の先生方は必死

で子どもたちを助けたそうです。誰も津波が来るなんて想像していなかったでしょうし、先生方もとても怖かったと思います。それでも、命を張って子どもたちを守ったと聞き、これが保育者というものだと思いました。

私にとってこの4日間は本当に貴重な時間となりました。私たちがテレビや新聞で見ているのは本当に一部で、実際にはもっと辛くて過酷なことばかりなのだ、このボランティアに参加していなければ知らずにいたかもしれません。被災地の方々は誰一人弱音を吐くことなく、みんなが笑顔で過ごしており、私たちも被災地の方々から勇気や元気をもらいました。私たちはちょっとしたことでも辛いなどと口にすることがあります。しかし、どんなに辛いことがあっても、笑顔で頑張っている人がたくさんいるんだということを改めて感じ、強く生きようと思えました。さらに、被災地の方々は、「自分が助からなければ他の人を助けることができないから、自分の命が一番大切だ」と話してくれました。私はそれを聞き、保育者にとって一番大切なのは、小さな命を預かっているという責任の重さをしっかりと理解し、子ども達の命を守ることだと、気づくことができました。このボランティアに参加することで、たくさんを知り、自分自身、成長することができたと思います。こうして被災地の方々と出会えたことを本当に良かったと思っています。そして、この先少しでも多くの人に震災や被災地の事を知ってもらいたいです。愛知県からでもできる事は沢山あると思うので、これからも被災地の方々の力になれるように活動していけたらと思います。



チーム・パティシエ 被災地の方々を思い浮かべながら

私たちチーム・パティシエは、東日本大震災復興支援ボランティアの一環として被災地の方々へ茶話会用のケーキを毎月送っています。学生主体で毎月何を作るかレシピを考え、調理室で「皆さんの食べている顔」を考えながら作っていました。

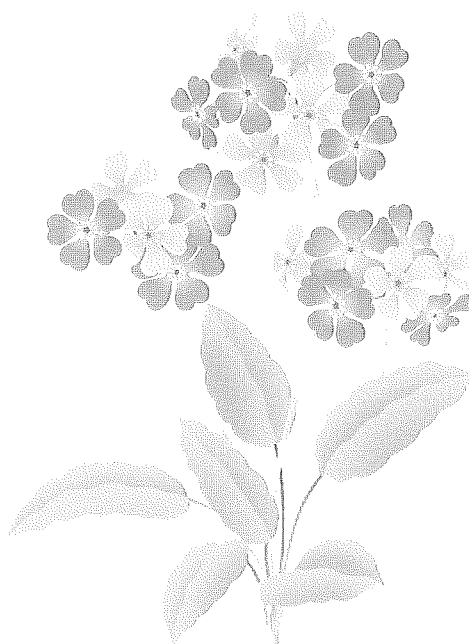
きのこ山&マリオのキノコという、ホットケーキ生地をたこ焼き器で焼いて、パイ生地をねじったものを刺して焼いたものやハート形のりんごのケーキやチョコチップスコーンなども作りました。その他、ハロウィンが近いときには、かぼちゃのパウンドケーキを焼きました。1月には黒豆の入った抹茶のパウンドケーキを作りました。被災地の方々が笑顔になるようにと気持ちを込めて、季節に会うよう

に意見を出し合いお菓子作りをしました。

被災地の方々からチーム・パティシエに、お礼の葉書をいただきました。ありがとうございますと感謝の思いが書かれていました。それを読んで幸せな気持ちになりました。喜んでいただけるよう次も作ろうという原動力になりました。

この活動を通して、離れた場所においても、人の役に立てることを学びました。また、人が喜ぶことに、幸せを感じることができました。皆と力を合わせて活動できたことに感謝しています。

今後もこのような活動を行っていきたいと思います。



あとがきにかえて

B 日程引率教員：山脇 眞弓

私はこのプロジェクトに参加して多くのことを学びました。

この東日本大震災は日本中を激震した重大な出来事でした。しかしこの2年の歳月は、震災体験者以外の人たちの思いを、少しずつ風化させてしまっているのではないのでしょうか。

今回、東日本へ初めて訪れ、震災時に報道で得た情報より荒廃した様子は、私の想像をはるかに超えるものでした。実は私もこの大地震には特別な思いがあります。それは、娘が東北大学に在学中に被災したことです。震災当日は本人と連絡が取れず、北九州に帰ってくるのに1週間の時間を要し、戻る途中に携帯電話で声を聞く事はできましたが、顔を見るまでの数日間は、一日千秋の思いで待っていたという体験があるのです。

東北の福島に着いた初日、震災当時海面下にあったという町を通り、ふじ幼稚園を訪れました。ふじ幼稚園は、施設が整った大きな幼稚園で広い田園地帯の中に開設された新しくとてもきれいで、園庭の遊具もあまり使われた形跡は感じられない、立地条件の良い園舎でした。園の周りには民家が立ち並び、地域の風景と一体化しているため、園舎の入り口に亡くなった子どもたちの祭壇が設置されていないとそこで惨劇があったことに気づくことはできませんでした。

津波の現状を把握できていない私が園舎を回って見ている内に心に浮かんだ景色は、各保育室から聞こえてくるかわいく元気な歌声や、園のいたる所で駆け回る子どもたちの姿、笑顔で遊具の周りで遊んでいる子どもたちの様子などが想像され、先生と子どもたちがこの園舎で、日々楽しい生活を送っている様子でした。

そんな思いを胸に園舎を観察していると、園の外壁には確認することができなかった震災の痕跡が、園舎の中や建物の片隅にみることができました。津波の爪痕は、園舎の内壁の地上1メートルの高さのいたる所に大小の穴がいくつも開き、廊下や建物の床には重いものが計り知れない力で押されて動いた傷跡が生々しく残っていました。さらに建物の外壁を注意深く見ると、バスの車庫の壁2メートル以上の高さの所に、津波の水位が一本の線になり残っているのを確認することができました。

三日目は新築されたふじ幼稚園を訪問し、学生による保育ボランティアを行いました。

保育が終わり、先生方と懇親会を行う中で、園長先生から「ふじ幼稚園で何が起こったのか」、地震や津波による惨状を聞き先生方の心の中にとっても深い悲しみがあることを知り、その時の様子を想像してあまりに悲しい出来事に、教員や学生は涙を流しながら話を聞いていました。

最終日に再度被災したふじ幼稚園を訪れた時、初日に見学した時とは違いいろいろな話が蘇り、ここでは筆舌に尽くしがたい惨劇が起こったことを、園庭の片隅にある花壇の12個の風車と12体の小さなお地藏様が語っていました。

お別れにふじ幼稚園を訪れた時、子どもたちが歌ってくれた園歌にひまわりの花の事がたくさん歌詞に織り込まれていることに気づき、歌を聞きながら園庭を見ると至るところにひまわりの花が咲いていて、柳城短期大学の校門の所にもひまわりの花が咲いていたことを思い出しました。

このひまわりには、震災で亡くなった子どもにまつわるお話があり、今でも大事に園の子どもたちがお世話をしているのだと聞き、さらにその思いを新しい園の歌詞にも取り入れ、亡くなった子どもたちのことをこれからも忘れないようにしていると園長先生がお話しされました。

現在のふじ幼稚園には2年前の津波を体験した子どもたちはほとんど卒園していませんが、震災によるつらい体験をした先生はほとんど残っており、先生方の心の中には震災の時の子ども達の姿や、子どもたちを助けた後、低体温症で亡くなられた同僚の先生の事が今も心の底に深く残っていることをその笑顔の中から感じ、先生方の心痛は計り知れないものがあると実感しました。

私たちは事前認識として、幼い子どもたちは地震や津波を体験しているため心的外傷が起り、悲しみや苦しみから立ち直れていないのではないかと予想をしていましたが、学生と保育を行う様子からは特異な行動は何も感じることはなく、私たちが日々接している愛知県の園児達よりもとても落ち着いた保育が行われているように感じ、少し驚きまし

た。しかし園の先生のお話を聞くと、子どもたちは「自分が体験した震災や津波の話をする大人たちがとても悲しむ話」であり「人前ではこの話はしてはいけないことだ」と子どもながらに理解しているのであえて話さないのだと聞き、子どもたちも幼いながら現実を見つめ状況判断していることに心が痛みました。

終始笑顔で接してくれた子どもたちに、今後この子たちが成長する過程でPTSDが起らないようにと心から祈りました。

新地のセンターを訪問し、仮設住宅で暮らす方とお会いして被災者の現状や生活の様子などをお聞きしました。被災された時の自分の体験を淡々と語られる被災者の方の表情をみて、人は想像を絶する体験をすると表情を無くし、話し言葉の語気にも感情を表出しなくなるのだなと感じました。

新地のセンターの方と被災地を巡礼している時の説明では、教会は、昨年ボランティアの学生が訪れた時には建物をみることはできましたが、破損が激しいため取り壊されたと聞きました。

教会のあった小高い丘の上から海岸を見下ろすと、近くの住宅地は見渡す限り何もない荒地になり、被災者の方が言われた「津波が町を持って行った」という言葉が蘇りました。ぼつぼつと立っている民家は大きなダメージを受けたままで、1階部分にはほとんど壁がなく柱が残っているだけの状態や、道路脇にあるガードレールが一方向に規則的に折れ曲っていたり、電信柱や公共施設の建物のコンクリートの柱は、鉄筋がむき出しになり潮風でさびてしまい、道路の至る所は地震で亀裂が入ったり段差ができ、海岸線の堤防は壊れたり流されたりして、危険個所にはロープが張られていました。波の音が壊れたコンクリートに反響して、もの悲しく聞こえるような感じさえました。そんな広大な土地の風景を、腰の高さほどに生えた雑草が風に揺らぎ、見る者に惨い爪痕を隠すようにやさしい景色として映し出していました。

仮設住宅を訪問した折、出会った高齢者の方々と茶話会を通して交流を深めました。

そこで行われていたのは裂き編づくりやブローチ・小物づくりなど手芸品を作っているおばあちゃんたちの姿でした。被災し生きる望みを失い、何もすることができず、部屋に閉じこもっていることが多かった被災当時、周りの人からの声掛けで始めた手作業は、深い悲しみの中にある心を生かす、生きていることを実感する、元気を取り戻すための作業だったと手作業をしながら話してくださいました。私たちも裂き編づくりを体験させてほしいとお願いすると、皆さんは孫に教えるように、笑顔で丁寧に織り方を教えてくださいました。この手作業を通して「命をつなげる、自分を取り戻す、生を実感できる作業だ」ということをこの暖かな雰囲気の中で教えられました。この時間は、私たちにとっても和やかで幸せを感じることができるひと時でした。

お別れする日、新地のセンターの方や仮設住宅の方が見送ってくださいました。

一人のおばあちゃんが大きく手を振りながら「私も頑張るから、あなたたちも頑張るんだよ」と笑顔で言われた時に、ボランティアに行った私たちが励まされ、その言葉に託された想いがひしひしと伝わり、手を振ってくださっている皆さんの姿が涙で幾重にもぼやけて、胸が熱くなりました。東北の空は貫けるような青空が広がり、コスモスの花が初秋の風に揺らいでいました。

今回、このプロジェクトに参加して、本学の建学の精神である「愛をもって仕えなさい」という教えを強く感じる事ができ、かけがえのない大きな温かい贈り物を被災地の方々から頂いたボランティア活動だったと思います。

これからもこのプロジェクトに多くの学生が参加し、「本学の建学の精神」を実際に体験をとおして感じ、考え、学んでほしいと思いました。そのためにこの活動は「本学の学びの継承」として継続をしていくことも大切ではないでしょうか。

最後に、この震災で亡くなられた皆様のご冥福をお祈りいたします。さらに、ご家族、ご友人、知人など、大切な方々を亡くされた皆様に心よりお悔やみ申し上げます。

一日も早く被災地が復興し、多くの方に明るい笑顔が戻られることを心よりお祈りいたします。

発行日 2014年3月17日
編集 名古屋柳城短期大学 キリスト教センター（宗教委員会）
発行 名古屋柳城短期大学
〒466-0034
名古屋市昭和区明月町2-54
TEL 052-841-2635（代）
FAX 052-841-2697
印刷 株式会社 一誠社

